

アメリカ研修を振り返る

村石 明子

アメリカ留学から5年、首都圏コーチ会議でアメリカキャンプに参加してから2年半、久しぶりにアメリカに行ってきました。“Seeing is believing” やっぱ、実際を見る事、そこから考える事の重要性を感じた旅となりました。

今回は、私の大学のプログラムで海外の医療施設見学を行うというもので、アメリカでも数少ない尊厳死を州の法律が認めているオレゴン州のポートランドという所に行ってきました。研修を通して、言葉を理解する事と日本とアメリカの国自体の比較から気がついた事についてまとめたいと思います。



【言葉を理解する事】

今回の旅で強く感じたのは、言葉がなくとも人は仲良くなれるが、言葉を理解する力があれば人を深く知れるという事です。研修では医療現場に行く為、通訳の方が同行してくれました。しかし、通訳された言葉に違和感を持つ事もあり、言葉を理解する事の難しさを痛感しました。決して通訳の方が間違っているというのではなく、通訳の方は正確に訳してくれているのです。しかし、私が感じた違和感というのは、喋る人の人間性や国民的習慣を踏まえると訳し方が変わると思ったからです。例えば、「I don't know」という言葉をアメリカ人は多用します。適当な事を言いたくないという気持ちがあればこそ、知らないことは知らないのよ～程度にさらっと言っているのですが、勇気を出して質問した事に「知らないわ」と言われるとウッ！！と来てしまうのが日本人的な考え方でしょう。また、



本当に微妙なニュアンスを含むものや皮肉を込めているもの理解するのは難しく、その言葉と表情、両方を同時に感じ取る事でしか理解出来ません。言葉を理解するという事は相手の表情とその人の言葉を合わせて理解する事であり、人を通して訳される言葉というのは、話している人の気持ちまでをしっかりと理解するのは難しいのだと思いました。

また、言葉を理解するという点において大きな気づきがありました。それは、私自身が英語は英語でしか理解していない事です。ある時、病院内に入れる人数制限から通訳の方が足りないという事があり、一時的に私が通訳をするという機会がありました。スタッフが簡単な英語で話してくれて、微妙なニュアンスの違いは確認をしながら「なるほど」と理解したのですが、いざ日本語に訳すとなると適切な言葉が浮かばない。英語を理解していないというのではなく、聞き取り理解した英語を正確な日本語に訳せないという事です。その話をスタッフにすると、英語を考えて喋る人の頭ではなく英語を自然に話せる人の頭だと大変驚かれました。長年のラボと留学のおかげかなあと思う気づきでした。

【アメリカという国と日本という国の比較】

アメリカの町を歩いていると、身体に障害を持つ人が働いている姿を目にします。車椅子の後にコーヒーマーカーを積み、お替りのコーヒーを注ぐ、本屋さんのレジで働くなど。

みんな笑顔で生き活きと働いています。身体に障害を持っていても働ける様な工夫を企業が率先して応援しています。日本では最近になって、ようやく障害者の働く権利が言われ始めているけれど、残っている身体機能で働ける事をやる傾向が強いように思います。企業が働ける様な工夫をする事や機械を導入するケースは少なく、やっぱりまだまだ発展していないのが現状だと思います。働く権利を持っていて働かないのと、働く事すら難しいのとは違う、という事を痛感しました。

働く事に関してはアメリカが進んでいる様に感じましたが、反面日本の皆保険制度は素晴らしいと感じる事もありました。アメリカの医療保険制度は低所得者用と老人用にあるのみで後は個人で入るしかありません。つまり、所得によっては低所得者のところには入らないが個人の保険に入るのは難しい人々もいます。アメリカでの授業中「その事に対してどう思いますか？」と質問した所、「fair but unfair」苦しそうに言ったその言葉の意味が分かる気がしました。それ以外にも、多くの見学施設はとても綺麗で進んだものでしたが、バスの外にホームレスがボードを持って呼びかける姿や公共の交通手段を使うのは多くは貧困低所得層の人々という現状に、アメリカの強くなければ生きられない社会と日本の弱さを養護して生きる社会を感じた気がします。



また、日本もアメリカを見習わなくてはいけないと思った事があります。その一つがマクドナルドハウス（難病児の家族に対する支援施設）を訪れた際、耳にしたアメリカの企業の免税制度でした。それは、企業が医療施設や家族支援施設などに協力・資金援助などをすると税金を納める必要性がなくなるというものです。アメリカでは大きな病院は都市に多い為、子どもを大病院に入院させる際に家族が泊まる施設に困らない様に施設提供をするというのがマクドナルドハウスです。基本的には1泊 20\$（2000～3000 円弱）で一部屋借りられるというのですが、医療費に苦しんでいる家庭に対しては払える限りでいいですというのがこの施設のモットーです。ベッドは2つ、バストイレつきで、支援者が一部屋のコーディネートが出来るという豪華な部屋でした。主な支援者は、アーティストやディズニー、州立大学などでした。日本にもマクドナルドハウスはあるのですが、ハッピーセットから1円を提供するだけという状態で、資金繰りが大変だと言う話を聞いた事があります。実際に日本にマクドナルドハウスがあることを知らなかったメンバーが居た事にも驚きを覚えましたが、都市部に高度な医療施設が集中するという現状は日本も変わらないのに、国からの間接的な支援がこの様に違うのかと驚かされました。

この研修を通して、アメリカと日本の医療や支援の仕方の違いを学べた事はとても大きかったのですが、「人をちゃんと理解したい。だから英語をもっと知りたい」、そう思えた事はもっと大きな事でした。ただ、単純に医療施設を見て感じるだけではなく、今までの自分と英語の関わり方や留学での経験を見直す良い機会となりました。そして、英語を恐いと思うのではなく、日本だけでなく海外でも看護を勉強したいという新しい夢に繋がり日々を頑張って勉強したいと思っています。

